

島風

6/23
終結

6/23未明、牛島満司令官と長勇参謀長の自決により、組織的戦闘が終結する。しかし各地で戦闘が継続され、完全に終結したのは9/7のことだった。

6/19
必死の逃亡

敗色が濃厚になる中、日本軍は南部へ撤退し、時間稼ぎに努める。民間人は避難先であった壕から追い出され、日本兵に殺される事例も多発した。

6月23日 沖縄 慰霊の日 打ち寄せる波 わたる島風

地獄の戦場

——「捨て石」になった沖縄——

1944年6月以降、「絶対国防圏（日本国の存続のために絶対に守らなければならない地域）」であった南洋群島が、米軍の手によって陥落してゆく。大本営は日本本土（皇土）防衛を最重要とし、本土決戦に備え、沖縄の戦力を増強させる。本土防衛にかかる時間稼ぎを目的とした、沖縄を「捨て石」にする作戦であった。この前提が、沖縄における地獄のような戦況の長期化の根底にある。

沖縄戦では、軍人を遥かに上回る数の民間人が犠牲になった。毎年平和学習の度に講話をしてくださる戦争経験者の方々は、口を揃えてこう言う、「戦争は『人』を『人でない何か』に変えてしまう」と。死の恐怖に囚われて、人はより一層残忍な行為に及ぶという。

ここではそのすべてをととても語り切れないが、まずは沖縄戦を民間人の視点で概観しよう。

6月になると思い出す。立ち込める雨の匂い、濡れる月桃の花、少し生臭い潮風、道のド真ん中を占拠するアフリカマイマイ。ただでさえ蒸し暑いミニジャングル・沖縄が、より一層湿度と生きものの匂いを強くするのが6月だった。

6月23日は慰霊の日で学校は休みだった。糸満の摩文仁にある平和祈念公園では式典が執りおこなわれ、正午になると黙祷を捧げる。この1分間だけは、どの沖縄県民も手を合わせ、凄惨な過去へと想いを馳せる。島を包む沈黙。ただ南風だけが通り抜ける。

進学に合わせて京都へ出てきた。この6月23日は当然「普通」に過ぎ去る日々の一コマでしかない。それはすぐく当たり前なこと、仕方のないことで、今後も変わらないことなのだろう。しかし、ふと一瞬だけでも、視線を南西に向けてほしいとも思う。いつか歓声を上げた翠玉の海が波間に隠した屍、蒼穹の空がこぼした涙、たちこめた「死」の匂い……。

戦後80年を迎える今年の6月23日は、故郷・沖縄から一陣の祈りの島風が、京都にまで届くことを願って。（でこぼん）

6/18
学徒隊の彷徨

兵力が不足する中、徴兵年齢に満たない14歳から19歳の男子学徒は兵士として日本軍に動員された。鉄血勤皇隊、あるいは学徒通信隊と呼ばれた彼らは、乏しい装備で戦闘や後方支援にあたったが、6月下旬には各部隊で解散命令が出され、戦場をさまようことになる。全動員数の約半数が死亡する。

女学生も看護要員として軍に動員された。特に有名なのは「ひめゆり学徒隊」だろう。劣悪な環境の中で看護活動にあたるが、6/18の解散後、その多くが死亡・行方不明となった。教員を目指し、かつて今の学生とほとんど変わらない生活を楽しんでいた彼女たちが綴る体験記は、自分のことのように胸を苦しめてやまない。



『絵本ひめゆり』（2011）
文／ひめゆり平和祈念資料館
絵／三田圭介 フォレスト
小学生向けの絵本だが、大学生が読んでも、ことばを失う。

8/22
対馬丸沈没

疎開が進む中、多数の学童を含む計1,778名を載せた対馬丸が、米軍の攻撃を受け沈没。1,484名が亡くなったとされる。

3/26
「集団自決」

3/26に慶良間諸島、4/1に沖縄本島へ米軍が上陸する。「鬼畜米兵に捕まるのなら」と、各地で手榴弾や剃刀、農具などで互いに命を絶つ「集団自決」が多発した。

はみだし
すてーじ

普段使う靴が2つあるのだからどちらもすり減って踵の所から水が入ってくるので梅雨までには新調したい（総・4 たけのこ）
⇒そのものもちの良さに脱帽、わたしや足元にも及ばないようで……。踵が濡れていても、しっかりと褒め称えます（新しい靴となら、きっと雨の日も楽しいですね；編）

米軍
1万 2,520 人

県外出身の日本兵
6万 5,908 人

沖縄戦の戦没者数
計 20万 656 人

沖縄県出身者
計 12万 2,228 人

一般住民（推定）
約 9万 4,000 人

県出身の軍人・軍属
2万 8,828 人

オキナワン・ロック

米軍基地のほど近く。コザの街は、米兵を相手にした店が立ち並んでいた。アメリカのロック文化に触れる中で、ジョージ紫を中心に結成したバンド・紫をはじめ、多くのバンドが誕生、音楽を武器に戦った。

Very まーさんどー

「アメリカ生まれ、沖縄育ち」で有名なブルーシールアイスクリームや、A & W、ジミー（ケーキを中心に販売）をはじめ多くのチェーン店は、基地の中の食文化に影響を受けたオーナーが立ち上げた。

県民の生活と

ポップなアメリカ

北谷のアメリカンビレッジや、ハンバーガーにステーキといったローカルグルメチェーンなど、沖縄にはアメリカ文化と融合してできたものが数多く存在し、地元・観光客を問わず人気を博している。私も大好きだ。しかし、これらの成果は、どうにかして生活を続けようと苦慮した結果に生まれたものだ。いつしかそれはちゃんぷる一文化の代名詞として、当たり前のように享受されている。

米軍と沖縄の光と影

いちやりばちよーでー、出会えば皆兄弟

本当はきっと手と手つなげるはずなのに――

沖縄には「いちやりばちよーでー」ということばがある。耳にしたことがある人も多いかもしれない。「一度出会えば皆兄弟」中継貿易で栄えた琉球王国時代から、様々な人と交わってきた沖縄のちゃんぷる一文化を代表する、私の好きな沖縄方言のひとつだ。どんな来訪者も、海のように広い胸のもとに包み込むあたたかさを感じる。

戦後、アメリカの統治下に入ったときも例外でなかった。方言でいうところの「アメリカ世」のもとに、今も観光客でにぎわうローカルグルメチェーン店が立ち上がったり、沖縄民謡とロックが融合した「オキナワン・ロック」と呼ばれるジャンルが確立したりと、先人たちは上手く「ちゃんぷるー（まぜ合わせること）」して逞しく生きてきた。

しかし、人々は心から彼らに気を許していたわけではない。

島に残った基地、その建設に伴って奪われた自分の土地、空には絶えず軍用機が飛び交い、米兵が起こした事件は数知れず。最初から上手く「ちゃんぷるー」していたわけではない、ただ生きるために必要だったのだ。すでに県民の生活の一部となった米軍との関係・基地問題について、賛成か反対かの二択で語ることは不可能だと思う。

不発弾約 1,800t

沖縄戦の負の遺産として、大地には今も約1,878トンもの不発弾が眠っているとされる。不発弾だと知らずに遊んでいた児童が死傷するなど現在も事件が相次ぎ、処理が急がれる。

県民の生活と

ダークなアメリカ

日本の国土面積の0.6%しかない沖縄に、70%以上の基地が集中していることはもはや周知の事実だろう。普天間飛行場のように騒音に苦しめられたり、自然への悪影響が懸念されたり、はたまた米兵との交通事故や凶悪な事件におびえたり。1959年に宮森小学校へ米軍のジェット機が墜落し、多くの死傷者が出た事件は映画化もされた。先祖代々の地を、基地にされてしまった人も多く、溝は未だに深い。

（農・統 いわ）

学生生活最後の1年間、全力であそびます！

⇒学生生活はどうも「人生の夏休み」だったらいいですからね、それはもう遊びまくってください！

（「夏休みの宿題」を最後まで放置しないよう、きつく言い聞かせているところです；編）

はみだし
すてーじ

はみだし
すてーじ

非体験世代が伝える戦争

「自分の体験」

として戦争を語り継ぐには

JYMA日本青年遺骨収集団関西支部
京都大学工学研究科

金原大樹

JYMA とは？

JYMA日本青年遺骨収集団は、「慰霊と伝承」のテーマのもとに学生が集い、遺骨収集や慰霊行事への参加、戦史の勉強に資料館での講演会といった活動に取り組んでいる。

↓JYMAの詳細は以下をチェック！



▲HP



▲Instagram



▲X

Mail : npojyma@gmail.com

——JYMAに参加したきっかけは何ですか？

きっかけは本当になんでもなかった。僕は学部3回生の秋に入会したんですが、その夏にYouTubeのショート動画で政治に興味を持つようになって。それから色々調べていくうちに、JYMAの存在を知って「カッコイイな」と思い、ボランティア活動や歴史に対する興味と、学生団体への参加にかかる心理的なハードルの低さもあって、思い切ってメール。そのまま参加することになりました（笑）

——実際に活動に参加するようになってから気づいたことなどはありますか？

まずは、活動に参加している学生が思っていたより「普通」の学生だったことに驚きました。特殊な背景を抱えた人や、強烈な政治思想を爆発させている人は思っていたよりいなくて、やるときは真面目にやる、本当に普通の学生ばかりですね。

遺骨収集の課題も目の当たりにするようになりました。お金と人数の必要性はもちろんのこと、遺骨収集をおこないたい土地の所有者が不在の際のやり取りであったり、海外におけるDNA鑑定と遺骨返還の問題から、返還

までに2～5年と長い時間がかかったりするなど、悔しい思いをすることが多々あります。

——活動で大事にしていることは何ですか？

遺骨の発見を待つ遺族や戦友の方々の強い思いを尊重し、何より現地で散華された戦没者のための活動を心掛けています。どんなに小さな遺骨の破片も丁寧に扱い、活動前後の拝礼・黙祷も一つ一つ丁寧にこなっています。

——非体験者による活動の意義について、どう考えますか？

きっかけはどうであれ、活動を続ける中で意味は見えてくると思います。特に今は、体験者や遺族の方から実際に現場でお話を聞きながら活動ができる、最後の機会だとも思います。このような交流の中で遺骨収集をするという体験が、戦争を「自分の体験」として熱を持って語り継ぐものになるのではないかなと。今後も可能な限り活動には関わっていきたいですね。「まだまだ若い君たちは」と褒めてくれる遺族の方々の願い・期待に応えるためにも、たった一瞬の経験で終えるのではなく、少しでも長く関わり続けていきたいです。

「何かはじめてみたい！」

と思ったら

図書館で

『沖縄戦を知る事典』（吉浜ほか、2019、吉川弘文館）は初学者にもわかりやすいと思う。



ネットで

「沖縄平和学習アーカイブ」では貴重な体験談を地域や時系列に沿って聞くことができる。



▲沖縄平和学習アーカイブHP

生協で

全国から学生が集い、現地で「見て」「聞いて」「話す」「Peace Now!」活動が毎年展開される。



▲Peace Now! HP

（理・1 ばふえ）

⇒バイトの合格通知って、なんだか受験の合格発表を思い出しますよね～。京大に受かったんだから、バイトもきっと大丈夫ですよ！

（働く気概の存在を大いに褒め称えたい；編）

バイトの面接受かってくれ～

⇒バイトの合格通知って、なんだか受験の合格発表を思い出しますよね～。京大に受かったんだから、バイトもきっと大丈夫ですよ！

グッドラック！